



全農教

# 日本帰化植物友の会通信



NO.12 [2014年7月15日 発行]

## 滋賀県琵琶湖南湖に広がる帰化水草，オオバナミズキンバイ(広義)

植村修二・村長昭義

琵琶湖に隣接する赤野井湾沿岸（滋賀県守山市赤野井町）において、外来種の水生植物オオバナミズキンバイが142平方メートルにわたって繁殖しているのが確認されて以降急激に生息域が広がり、2012年には大津、守山、草津各市の南湖で2009年の129倍に当たる1万8,292平方メートルにまで拡大したと報道されている（京都新聞2013）。

オオバナミズキンバイ（広義）*Ludwigia grandiflora* (Michx.) Greuter et Burdet (s. lat.) は南米および北米南部原産の多年生植物で、欧州各地に帰化し侵略的水草となっている（Plant Protection Service 2011）。我が国では、2007年に兵庫県加西市のため池で初めて野外での生育が確認され（須山ら2008）、和歌山県にも定着している情報がある（志賀2010）。

筆者らは同年9月29日、赤野井町矢島川河口のオオバナミズキンバイの生育地を訪れ、その生育状況を観察した。水際に生育した個体は水面に向かって匍匐する茎を長く伸ばし、水面では長い水中茎（走出枝）を盛んに分枝し、浮遊状態で密なマット状の茂み（バイオマス）を形成していた（図1）。その内部では直立または斜上した水上茎を多数発生させて抽水状態での生育に移行すると同時に、周辺部からは長い走出枝を外側に向かって伸ばし、バイオマスの占有面積を増大させていた。

赤野井町では、水質の富栄養化が本種の浮遊生活に有利な条件を提供していると思われ、植物体断片由来のパッチ状の茂みも形成されていた（図2）。さらに同日、琵琶湖（南湖）の湖岸にオオバナミズキンバイの植物体の一部が打ち上げられ、新たな場所で生育し始めているのを見ている。観察日の2週間ほど前の2013年9月16日には、台風18号が列島を縦断した。気象庁は滋賀と京都、福井の3府県に大雨特別警報を発表し、この日記録的な降水量を観測した。このため、今後、淀川水系の下流域においても、流出した本種の定着が見られないかモニタリングしていく必要がある。

オオバナミズキンバイの葉形は生育段階や状況により

大きく変化する。越冬期（図10）や、それに次ぐ初期成長の時期、あるいは水中では円形の葉をつける。葉は互生し、茎頂部では節間がつまりロゼット状に葉をつける。また、初期成長の時期、オオバナミズキンバイは茎、葉ともに無毛で、在来種のミズキンバイ *Ludwigia peploides* (Kunth) Raven subsp. *stipulacea* (Ohwi) Raven（図5, 7）の植物体と区別しがたい。浮遊状態では、オオバナミズキンバイの走出枝は無毛で、葉は長さ9cmほどの披針形（図3）～楕円形（図4）となる。陸生状態で生育した茎や水上茎は有毛で、開出した軟毛がある。気中葉は楕円形～長倒皮針形で、葉縁に細毛、裏面や脈状には軟毛がある。葉身基部はくさび形で、茎上部の葉では柄はほとんどない。葉柄基部には褐色の小さな楕円形の托葉がある。

7～10月、陸生状態で生育した茎や水上茎において着花が見られる（図6, 8）。花は鮮橙黄色で直径約3.0～4.0cmで、ミズキンバイの花（図7）よりも大きく、花弁、萼片はともに5枚である。果実は円柱形となるらしいが、完熟したものをまだ確認していない。

滋賀県下では、オオバナミズキンバイの植物体の多くの部分が冬期に枯死し、生き残った茎断片から生育を始める（図9, 10）。水面にあった植物体の大半が低温で枯死し、部分的に生き残ることが本種の分散に有利な条件であることは否めない。

赤野井町でみられるオオバナミズキンバイはアクアリウム用水草を扱った図鑑（吉野2005）に掲載された画像を見る限り、*Ludwigia* sp. (from Pantanal) あるいは *Ludwigia* sp. (from Roraima) として我が国で流通している植物に酷似する。周囲の環境をみても、本種の原産国からしても、本種が非意図的にここに入ってきたとは考えられず、水草マニアが本種を持ち込んだ可能性が高い。

水草類には、池や川に植物体の一部を投げ入れるだけで容易に定着する種が多い。実際、これまで見なかった植物として筆者の一人（植村）に届けられる同定依頼の

水草類が増えている。オオバナミズキンバイ、アマゾントチカガミ、ウチワゼニクサなどのほか、トチカガミ、ミズタガラシなど在来種とされるものもある。今回、花の画像を紹介したミズキンバイも本来の自生品ではなく、その由来が不明なものである。

水草類は持ち込むのは実に容易であるが、何らかの問題があって防除しなければならない時、除去作業は困難をきわめる。このような事例が頻発すると、将来、「水草である」という条件で栽培や流通（輸送）に、「禁止」などきびしい規制がかかることになるかもしれない。それは、園芸やアクアリウムで水草を愛好することができないことを意味する。

## 参考文献

- 京都新聞 2013: 「オオバナミズキンバイ」 駆除へ協議会 琵琶湖で急増受け, <http://www.kyoto-np.co.jp/environment/article/20131222000007> (2013年12月27日アクセス).
- Plant Protection Service 2011: *Ludwigia grandiflora* (Michx.) Greuter & Burdet A guide to identification, risk assessment and management, [http://www.q-bank.eu/Plants/Controlsheets/Ludwigia\\_grandiflora\\_office\\_guide.pdf](http://www.q-bank.eu/Plants/Controlsheets/Ludwigia_grandiflora_office_guide.pdf) (2013年12月27日アクセス).
- 滋賀 隆 2010: 和歌山県でオオバナミズキンバイ *Ludwigia grandiflora* が定着, Nuphar-love, <http://d.hatena.ne.jp/Nuphar-love/20100616/1276738040> (2013年12月27日アクセス).
- 須山知香ら 2008: 侵略的水草 *Ludwigia grandiflora* subsp. *grandiflora* (新称: オオバナミズキンバイ, アカバナ科) の野外生育確認およびその染色体数, 水草研究会誌 (89):1-8.
- 吉野 敏 2005: 世界の水草 728 種図鑑, エムピージェー.



図1 水際に生育したオオバナミズキンバイ 矢島川河口 2013年9月29日



図2 オオバナミズキンバイのバッチ状バイオマス 矢島川河口 2013年9月29日



図3 オオバナミズキンバイの披針形の浮葉 矢島川河口 2013年9月29日





図4 オオバナミズキンバイの楕円形の浮葉  
矢島川 2013年8月23日



図5 ミズキンバイ 兵庫県西宮市(栽培) 2008年10月12日



図6 上: オオバナミズキンバイの花 矢島川 2013年8月7日



図7 下: ミズキンバイの花 大阪府箕面市(栽培) 2011年6月18日



図8 開花しているオオバナミズキンバイ 矢島川 2013年8月7日



図9 オオバナミズキンバイの越冬株 守山市山賀町 2014年3月19日



図10 オオバナミズキンバイの越冬株  
守山市山賀町 2014年3月19日



新刊書紹介

## ミミズ図鑑の発刊を祝す

函館短期大学長・教授 上平 幸好

図鑑になりえるのは、色彩の美しい花卉類とか鳥ないしは蝶の仲間とか、あるいは珍しい形をした昆虫、さらには化石等から復元した巨大な恐竜のように、一般的には著しい特徴のあるものと理解されるが、なんと色彩・形態ともに地味なミミズを対象とした図鑑が出版されたことに、大きな驚きを覚えたのは私ひとりではないであろう。

著者の石塚小太郎氏は、東京都とその近郊の長年にわたる調査から、1940年代以降しばらくと絶えていた日本産ミミズの新種の記載を、近年、多数報告している。その発表によって、わが国のフトミミズの研究は改めて弾みがついたといっても過言ではない。その仕事内容は研究機関に席を暖める多くの学者の心をつかみ、学位を授けられる資格のある人物として評価されて、新たな「ミミズ博士」が誕生した。

ミミズの地理的分布に関心を持っていた私と彼との縁ができたのも、同氏のほとぼしる研究への情熱を理解し、その喜びと苦悩を分かち合える仲間、ないしは助言者・指導者を求めての行脚のなせるところであったと承知している。今は、ライフワークとしてきたミミズ研究の、現時点における集大成を世の中に公開できた喜びを噛み締めているに違いない。

写真担当の皆越ようせい氏とは、土壌動物学会で面識を得た。同学会の懇親会で企画のあったチャリティーに出品されたワラジムシの写真が素晴らしく、私が落札し

たことがきっかけであったと記憶している。ところでミミズは、ご存知のとおり、細長い筒形をしているので、体表の特徴ある形質を写真に収めることは容易ではない。その仕事の出来映えは良く、石塚氏の研究論文にあるスケッチと分類学的記載だけでは、イメージアップすることは難しいところもあるのだが、写真はその点を補うことができおり、同定作業はより容易となった。改めて写真を用いた図鑑の重宝さを実感した。また、分類のみならず、ミミズの生態に関する情報も多く紹介されており、これは使える図鑑であると推奨できる。

ところで、本書に用いた学名には異論をもつ研究者もいると思うが、多くの種類を対象としたDNAに着目した研究成果がこれまで以上に発表され、改善が進められることを次世代の研究者に期待したい。

文字を連ねた単行本の出版とは異なり、図鑑となれば出版に必要とされた時間と経費は恐らく多額にのぼるはずと、自費出版をしたことのある経験から憶測する。しかしである……、世界に誇れる知的財産となる書籍の誕生に、全国農村教育協会は多大の助力をされたのである。同協会の底力は大地を耕すミミズのごとく、まさしく縁の下の力持ちである。後世に残る仕事の先鞭をつけたと評価されること確かと思う。本図鑑の誕生の産婆役を務めた同協会の英断に敬意を表したい。

「ミミズ図鑑」

石塚小太郎／著 皆越ようせい／写真

B5判 168頁 定価：本体4,800円＋税

ISBN：978-4-88137-172-5

発行：全国農村教育協会

TEL：03-3839-9160

FAX：03-3833-1665

新刊書紹介

## ミニ山野草図鑑 — 離弁花編 —

廣田 伸七／編

「ミニ雑草図鑑」をご存じの方は、本誌の読者にはたくさんいらっしゃるだろう。このたび、この姉妹編として「ミニ山野草図鑑 — 離弁花編 —」が出版された。

「ミニ雑草図鑑」は水田、水路・休耕田・水湿地、畑地、果樹園・非農耕地に生える、いわゆる人里植物を中心としたもので、雑草防除に携わる方々に広く受け入れられ、さらには自然観察を目的とする植物愛好家の方々にも愛用されるようになって、1996年の初版以来12刷を重ねてきたロングセラーである。

一方で、1990年には「日本原色雑草図鑑」の姉妹編に当る大著「日本山野草・樹木生態図鑑 — シダ類・裸子植物・被子植物（離弁花）編 —」が出版され、植物専門

家を中心に愛用されてきたが、同書は長らく品切れ状態にあった。このような事情から、「日本山野草・樹木生態図鑑」を簡便化し、より安価で入手しやすいミニ版への要望が高まっていた。これに呼応して出版されたのが、ここでご紹介する「ミニ山野草図鑑 — 離弁花編 —」である。

「ミニ山野草図鑑 — 離弁花編 —」は、底本となる「日本山野草・樹木生態図鑑 — シダ類・裸子植物・被子植物（離弁花）編 —」から、山野草（草本類）と低木・雑かん木類を選んで編集し、同書より解説を要約してまとめ上げたもので、さらに最近多い帰化植物を加え、670余種が掲載されている。

人里植物は「ミニ雑草図鑑」、丘陵地・高原・山地の植物は「ミニ山野草図鑑」という構図が見えてくるが、これら両環境に生える植物には、もちろん共通種も多い。この点について、本書はミニ雑草図鑑の姉妹編という性格を強く持つことから、すでにミニ雑草図鑑に掲載され

ている草本類は省略し、その旨を本文中に記すことで両書間の重複を避けている。

このところ、山野草はちょっとしたブームの観があって、書名に山野草を冠する本が多数出版されているようであるが、それらと比べた本書のいちばんの特長は、低木・雑かん木が掲載されていることであろう。本書にはヤドリギ科、アケビ科、ツツラフジ科、コショウ科、ウマノズクサ科、ユキノシタ科、バラ科、マメ科、トウダイグサ科、ミカン科、ドクウツギ科、ウルシ科、ニシキギ科、ミツバウツギ科、ツゲ科、ブドウ科、ジンチョウゲ科、グミ科、キブシ科、ミズキ科、ウコギ科の低木・雑かん木 140 種が掲載され、検索しやすいように低木・雑かん木専用の目次が全体の目次とは別に付されている。

## 新刊書紹介

野外観察ハンドブック

### 水辺の生きもの

— トンボ・カエル・メダカの世界 —

浅間 茂・田中正彦・柄澤保彦・岩瀬 徹／著

本書は谷津（やつ）に棲む生物を対象にしている。近年、谷津の生物は水面の埋め立て、基盤整備による水田の乾燥化、水路のコンクリート化、水質の悪化、耕作放棄による群落の遷移の進行、外来種の繁殖など、さまざまな変化によって生活が圧迫され、水辺環境の保全をどうするかが、現在、大きな課題となっている。

本書は、5部から構成され、まず1部では水辺の生きものの生活の場としての植物を抽水植物（ヨシやガマなど地下茎が水底の中をはい、茎の下部が水に浸かり上部が高く伸びて葉を広げる形をしている植物）、ミゾソバ、イヌホタルイ、チゴザサなど湿地・休耕田・水路の植物、藻類やヒシなどの水草に分けて40種を紹介している。

2部はトンボ編で、主要なトンボ50余種について山地の渓流、川の中流域、平地の池沼、樹林に囲まれた湿地、草が茂った湿地、水田・休耕田・用水路、汽水域などの生息場所別に取り上げ、トンボの特徴、分類、生活史を解説する。

また生物学的な話題だけでなく、神話に登場するトンボ、トンボの童謡や唱歌、洋の東西にみるトンボ観といった文化的側面についても幅広く紹介している点がユニークである。

3部カエル編では、両生類の特徴からスタートし、身近に見られるカエル12種の形態、分類、分布、生態を解説する。続く「カエルの生活」では代表的なカエルであるアズマヒキガエル、ニホンアマガエル、ニホンアカガエル、トウキョウダルマガエル、シュレーゲルアオガエル、ウシガエルの生活史、繁殖、成長、減少した理由について多くの写真を使って詳述する。トンボ編同様、カエルの文化的側面についても紹介している。

4部ではメダカ編。「世界のメダカ・日本のメダカ」で

る。低木・雑かん木はミニ雑草図鑑にも掲載されていないので、本書はミニ雑草図鑑の読者の要望にも的確にお答えできるだろう。ちなみにミニ雑草図鑑と本書を合わせると1,100余種が掲載されていることになり、手軽に雑草調べができる図鑑の分類がぐっと広がったといえる。またミニ雑草図鑑の姉妹編という性格を反映し、和名索引にはミニ雑草図鑑の掲載種も一緒に取り上げられていて便利である。

A5判 256頁 定価：本体2,900円＋税

発行：全国農村教育協会

TEL：03-3839-9160

FAX：03-3833-1665

メール hon@zennokyo.co.jp

メダカについて概観したあと、メダカの一生（産卵、孵化、成長、越冬、寿命、移動）について解説する。続いてメダカと外来種のカダヤシ・グッピーの見分け方に言及し、「メダカがすむ環境」の項では悪化する現状を考察する。さらにタモロコ、モツゴ、フナ、タナゴ、ドジョウ、ナマズなどメダカとともにくらす魚たちの分類・分布・生態についても解説している。

最後の5部は4人の著者による座談会形式で、谷津の自然環境の変化に対する生きものの変化、農業活動の変化による生きものへの影響、環境保全活動、環境教育などについて意見交換をしている。いわば本書の総まとめともいえる部分で、なかなか一筋縄では解決しない谷津の保全や復活という問題について、その解決のヒントを模索する。

本書の著者陣はいずれも千葉県生物学会の会員で、長年にわたり千葉県を舞台に調査・研究を行い、同時に生物教育、環境教育に携わってきたベテラン揃いである。したがって、フィールドも千葉県の谷津が中心になっているが、水辺のある他の地域でも十分に参考になる一般的な内容を含んでいる。

A5判 160頁 定価：本体2,400円＋税

発行：全国農村教育協会

TEL：03-3839-9160

FAX：03-3833-1665

メール：hon@zennokyo.co.jp

## ● 友の会会員の特典について

日本帰化植物友の会の会員の方には、全国農村教育協会発行の図書については、本体価格の1割引でお送りいたします。全国農村教育協会の図書でご希望のものがございましたら、FAXまたは郵送で注文して下さい（会員番号は宛名シールの下に記入してあります。）。

※なお、この特典は書店を通じての注文には適用されませんので、必ず直接申し込んで下さい（送料はかかりません。代金は請求書、振替用紙を同封しますから、現品到着後にお支払い下さい。）。



# ユキノシタ科の新帰化植物ロボウクモマグサ

植村修二・稗田真也・水田光雄・村長昭義

わが国において記録された帰化植物に関しては、キク科、マメ科、イネ科に属する植物が他科のものに比べて著しく多く、これらの科では定着している種が数多く認められている（長田 1972, 長田 1976, 清水ら 2001, 清水 2003, 植村ら 2010）。

これらに反して、多くの自生種があるにもかかわらず、帰化植物の占める種の割合が少ない科がいくつか存在する。

日本では木本となる種の帰化植物は少ないため、木本性植物で種の大部分が占められているブナ科、ツツジ科、ハイノキ科、スイカズラ科などには帰化植物といえる種がほとんどない。

草本性植物が主体となる科においても、今回表題にあげたユキノシタ科がそれにあたる。この科には、古い時代の渡来品であるとする説もあるユキノシタ *Saxifraga stolonifera* Curtis, 大阪府箕面市において空き地に放置された株が数年間生存したことを筆者の一人（植村）が観察したヒマラヤユキノシタ *Bergenia stracheyi* (Hook. f. et Thomson) Engl., 神奈川県鎌倉市に逸出した記録がある *Saxifraga cymbalaria* L. (奥津 2012) が帰化植物としてリストアップできるが、人によっては、栽培由来のこれらを帰化植物に含めないことも多い。

筆者の一人（村長）は見慣れないユキノシタ科植物を滋賀県彦根市で採集し、そのさく葉標本を近畿植物同好会室内例会の標本同定会（2012年1月15日）に持参した。筆者（植村・水田）が調べたが、その場ではユキノシタ属としか同定できなかった。と同時に、この属の植物の多くが冷涼な気候の山岳地域に分布しており、低地の路傍に生育していること自体に疑問があった。

筆者の一人（植村）がこのさく葉標本を持ち帰って、欧州のユキノシタ属のモノグラフ（Webb・Gornall

1989）などで調べた結果、欧州に広く分布し、北米の一部地域にも帰化している *Saxifraga tridactylites* L. であることがわかった。

筆者（村長・稗田）は、滋賀県における本種の分布状況を調査し、本種が低地の路傍で育つ例外的な種であることを明らかにした。このため、本種の名をロボウクモマグサ（路傍クモマグサ）と新称することにした。

ロボウクモマグサは一年生で、高さ 5~20 cm になる。腺毛の多い植物で、手で触れると粘りつく。根は非常に浅く、株を簡単に引き抜くことができる。日当たりのよい場所に生育する個体は、成熟期を向かえると株全体が赤く紅葉する（写真 1~3）。ロゼット葉はさじ形で切れ込まず、開花時には枯れていることが多い。茎につく葉は長さ 5~15 mm ほどで、全縁の葉以外に、深く 3 ないし 5 裂する葉をつける。葉腋に一つずつ花をつけ、滋賀県での開花期は 3 月下旬~4 月下旬。花弁は 5 枚、白色。がく片 5 枚、おしべ 10 本（写真 6）。果実は球形。

原産地である欧州では、アルカリ性土壌の場所を好み、日当たりのよい岩が多い斜面などに生育しているようである。また、壁面や石垣、都市部の舗道の隙間など人家の周辺にも見られる雑草的性質を持った種とされている。なお、Webb・Gornall (1989) には、ロボウクモマグサが南欧では日陰を好んで生育し、北欧では逆に日向にみられるという興味深い記述がある。

滋賀県においては長浜市、彦根市、東近江市、近江八幡市でロボウクモマグサが確認されており、県北東部に偏った分布を示している（図 1）。農道の路傍が主な生育場所で（写真 5）、侵入経路については全く不明である。舗道の隙間といった土壌がほとんどない所にも生えているほか、アスファルトに生えたコケ類の塊上に特に多く生育している（写真 4）。彦根市内の道路では、舗道脇に



写真1 成熟期になると株全体が紅葉する



写真2 高さ 5~20 cm



写真3 腺毛が多い



生育して盛り上がったコケの塊の上に限って、ロボウクモマグサが多くみられた。コケの塊はヤノウエノアカゴケ（キンシゴケ科）*Ceratodon purpureus* (Hedw.) Brid. とハリガネゴケ（ハリガネゴケ科）*Rosulabryum capillare* (Hedw.) J. R. Spence (= *Bryum capillare* Hedw.) の2種で形成されており、後者は葉形が標準のハリガネゴケより少し丸いタイプである。路傍の土壌がある部分は、オランダミミナグサ *Cerastium glomeratum* Thuill., オオイヌノフグリ *Veronica persica* Poir. がわずかに混ざるコメツブツメクサ *Trifolium dubium* Sibth. が優占する群落となっており、ロボウクモマグサはこの群落内には入っていけないようである。筆者の一人（稗田）は、彦根市内の麦畑周辺の道路では、畦畔部分にロボウクモマグサがノボロギク *Senecio vulgaris* L., オランダミミナグサ, アメリカフウロ *Geranium carolinianum* L., スズメノカタビラ *Poa annua* L. などと共に生育しているのを見ている。

滋賀県は近畿地方の多雪地域であり、その影響で春先の萌芽や成長が遅れる結果をまねき、ロボウクモマグサをはじめ、マキバスマレ *Viola arvensis* Murray (稗田 2013), ヒメナズナ *Erophila verna* (L.) Chevall. (村長未発表) など小型の帰化植物が定着するのかもしれない。そうであれば、今後これらの種はわが国の北部や日本海側の地域などに帰化する可能性が高いと思われる。

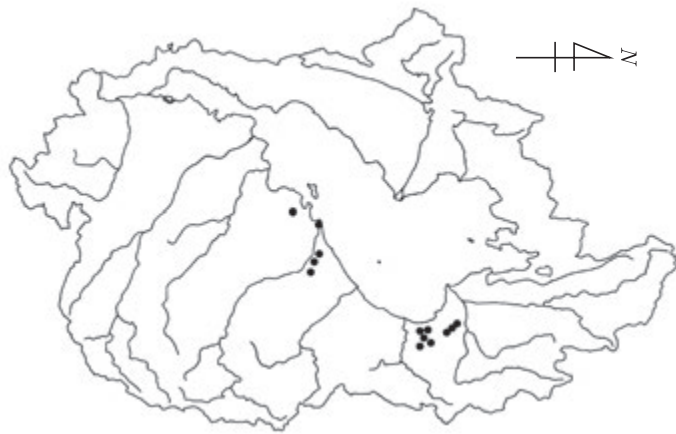
最後に、ロボウクモマグサの生育がみられたコケ類を

同定いただいた堺植物同好会の芦田喜治先生に厚くお礼申し上げます。

### 主な参考文献

- Blamey, M.・C. Grey-Wilson 1989: The Illustrated Flora of Britain and Northern Europe, Hodder & Stoughton.  
 稗田真也 2013: [naturplant: 5478] 滋賀県内のロボウクモマグサとマキバスマレ, 帰化植物メーリングリスト (アクセス日: 2013年4月6日).  
 奥津 均 2012: [naturplant: 5123] Re: ユキノシタ科の帰化植物, 帰化植物メーリングリスト (アクセス日: 2013年2月12日).  
 長田武正 1972: 日本帰化植物図鑑, 北隆館.  
 長田武正 1976: 原色日本帰化植物図鑑, 保育社.  
 清水矩宏ら 2001: 日本帰化植物写真図鑑 — Plant invader 600種一, 全国農村教育協会.  
 清水建美 2003: 日本の帰化植物, 平凡社.  
 植村修二ら 2010: 日本帰化植物写真図鑑 第2巻 — Plant invader 500種一, 全国農村教育協会.  
 植村修二 2012a: [naturplant: 5122] ユキノシタ科の帰化植物, 帰化植物メーリングリスト (アクセス日: 2012年2月12日).  
 植村修二 2012b: [naturplant: 5180] *Saxifraga tridactylites* L. を見えました, 帰化植物メーリングリスト (アクセス日: 2012年5月21日).  
 Webb, D. A.・R. J. Gornall 1989: *Saxifrages of Europe*, Christopher Helm.

図1 ロボウクモマグサの分布  
*Saxifraga tridactylites* L.



- 彦根市野良田町
- 長浜市田村町
- 長浜市加田町
- 長浜市寺田町
- 長浜市布勢町
- 長浜市常喜町
- 長浜市新栄町
- 長浜市山階町
- 長浜市泉町
- 近江八幡市大中町
- 能登川町栗見新田
- 彦根市本庄町
- 彦根市下稲葉町

写真4 コケ類の上に生育するロボウクモマグサ



写真5 農道の路傍が主な生育場所

写真6 花とがく片



## 毎日が楽しくなる「虫目のススメ」

— 虫と、虫をめぐる人の話 —

鈴木 海花／著

女性のほとんどが虫嫌いである、とは世の男性の一般的な見解だろう。実は、小生もそう考えているひとりであったが、本書で、どうやら今は違うらしいと思直した。

著者の鈴木海花氏は、現代の「虫愛する姫君」の名にふさわしい女性フォトエッセイストで、本書は『虫目で歩けば』（ブルースインターアクションズ刊）に続く2冊目の虫の本である。また虫好きが集まる「虫カフェ@原宿シーモアグラス」の主催者でもある。

虫好きの女性について「虫愛する姫たち vs 台風」という一文がある。台風が近づくなか、山梨県北杜市オオムラサキセンターで開かれたイベントでのこと。そこは、お父さんときた小学生の女の子、ツノゼミが大好きな小学4年生の男の子を連れてお母さん、地元北杜高校の女子高生、虫好きな娘のために申し込んだという母娘、女子大学生のふたり連れ、虫好きのOL、さらには80歳台と思われる杖をついたおばあちゃんまで、まさに「虫愛する姫一代記」みたいな年齢層の広さだったという。

本書は第1部「日々虫目」編、第2部「或る図鑑をめぐる人々を訪ねて」編、第3部「虫目観光」編の3部構成で「日々虫目」編では虫目で歩いて発見した数々の虫たち、ライトトラップに初挑戦、アサギマダラを飼育、などの話を美しい写真を添えて展開している。たしかに、身近にいる虫が宝石に見えれば、毎日が楽しいに違いない。

一番好きな虫は？と聞かれて、カメムシと答える著者にとって、『日本原色カメムシ図鑑』全3巻（全国農村教育協会刊）にまつわる人々を取材することは、本書を作る最大の動機でもあったに違いない。第2部では最強のカメムシ採集人として名高く、『昆虫にとってコンビニとは何か？』（朝日選書）、『自然との共生というウソ』（祥伝社新書）などの著作のあるサイエンスライター高橋敬一氏を牛久に訪ねたかと思えば、図鑑に掲載されている写真の大半を撮影した高井幹夫氏、ゲンバムシの研究で知られる山下泉氏、カメムシ図鑑をそもその成り立ちからプロデュースした生みの親川澤哲夫氏などを訪ねて高知へ飛ぶ。仕上げは弱冠37歳で第3巻の筆頭編者を務めた新進気鋭の分類学者石川忠氏を東大に取材する。長時間のインタビューを通して、困難な仕事をものともせず熱く楽しく情熱をかたむけている虫屋たちの人物像に肉薄している。

一転して第3部では、その土地でなければ発見できない面白さを虫目で発掘する様子を、女性ならではのしなやかな感性で描き出している。

最後になったが題名の「虫目」とは何か。著者によると「虫目」とは「身の回りの自然のディテールの美しさ、おもしろさが見える目」のことだそうで、「神は細部に宿る、という言葉のように、よく見ると自然は人知を超えた美しさや驚きに満ちています。」と前書で述べている。「虫」を「草」に置き換えても通用しそうである。

A5判 176頁 定価：本体1,900円＋税  
発行：全国農村教育協会  
TEL：03-3839-9160  
FAX：03-3833-1665  
メール：hon@zennokyo.co.jp

## これはなんでしょう？



コバノカキドオシ〔しそ科〕

*Glechoma hederacea* L. subsp. *hederacea*

撮影日：2014.4.13 場所：滋賀県長浜市大浦

提供者：京都府宇治市 上野勇雄様

これはコバノカキドオシでしょうか？と写真が送られてきました。植村修二先生に同定していただいたところ「この画像では、葉の様子が分かりづらいのですが、コバノカキドオシ（セイヨウカキドオシ）*Glechoma hederacea* L. subsp. *hederacea* と思います。おそらく、花の様子から、斑入カキドオシとして市販されているものが先祖返りして普通の緑葉となったものと思われる。」と教えていただきました。皆さん見たことがありますか？（注：送られてきた写真はカラー写真ですが、この頁はモノクロの1色頁ですのでモノクロで掲載しました。）

### 全農教・日本帰化植物 友の会事務局

〒110-0016 東京都台東区台東1-26-6  
(植調会館)全国農村教育協会内

代表 TEL 03-3833-1821 FAX 03-3833-1665  
事務担当 TEL 03-3839-9160

http://www.zennokyo.co.jp  
e-mail: kika@zennokyo.co.jp